

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①単元や一単位時間で育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりをする。②本時のめあて確認と振り返りの時間を大切に、子どもが主体的に学習を進められるようにする。③重点研究テーマを「自ら学びともに考え 行動する 台小の子の育成」とし、国語科を中心に、自分の思いを豊かに表現できる子を育てる。	①「台小ツリー」について教員でたびたび話にし、育てたい力を明確にして授業づくりに取り組むよう心掛けた。②めあてに対するまともな子ども達の気付きや言葉でつくるよう努めた。③ともに考えを中心に全担任が研究授業を行った。ペアやグループで考えを伝え合う場面を多く設定した。	B
道徳教育	①豊かな心の育成を目指して、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を推進する。②道徳科年間指導計画に沿った全学級の道徳科授業公開を年一回以上実施する。③自分の思いを書いたり話したりする活動の中で、自分自身を見つめたりなりたい自分をイメージしたりすることができるようにする。	①日常の様子を導入の材料に、学校行事や他教科との関連を考慮して道徳科の授業を展開した。②授業参観・土曜参観の場を活用し、保護者にも考えてもらいたい内容を公開した。③通年ワークシートを用いて、今の自分を見つめたり、本時のまとめを書いたりした。	B
健康教育	①家庭と連携し規則正しい生活を送ろうとする姿勢を培うとともに、食育や歯科保健教育、安全教育を実施する。②「台小体力アッププロジェクト」の運動集会を柱に、児童が運動の楽しさを味わい、外遊びを盛んにしたり、体力の向上に目を向けたりすることができるようにする。	①歯科指導前や長期休業中にはみがきカードを配付し、家庭で健康について考えるきっかけを設定した。決められた時刻までに登校できない児童が1割を超えるのが課題である。②運動への親しみをねらい、意図的に運動遊びの機会を設けた。	B
自分づくり教育 (キャリア教育)	①地域で体験的に学ぶ機会を積極的に設け、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高めるようにする。②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、子ども自身の姿容や成長を自己評価できるようにする。	①可能な範囲で積極的に地域へ出かけた。社会情勢に応じて行事を実施し、児童の活躍の場を設けた。②学期始めや年度末、運動会などで振り返りを行い、キャリアパスポートに綴って成長を確かめられるようにした。	B
いじめへの対応	①日常に潜むいじめを積極的に認知し、子どもの心情に寄り添うことを徹底する。②いじめ防止対策委員会を毎月実施し、認知案件の丁寧な経過確認、再発防止に努める。③いじめ防止研修を通し、全職員がいじめに対するアンテナを高くするとともに、年3回の児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制をつくる。	①②毎月のいじめ防止対策委員会定例会では、各学年から認知案件の進捗状況報告や気になる児童の情報を共有を行った。③夏休み中に研修を実施。また年3回のアンケート結果を全職員で共有し、未然防止の体制づくりに努めた。	B
人材育成・ 組織運営(働き方)	①5年次以下の教諭を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが推進役となって互いに授業公開をし、指導技術の向上を図る。②教務会を定期的に実施し、計画的な学校経営や行事推進に努める。③職務の外部委託や職員室アシスタントとの業務連携など、職務の簡便化・効率化を図り、働き方改革につなげる。	①メンターチーム構成員の直面している課題や、初任者研究授業など、必要な研修に自主的に取り組んだ。②週1回の教務会に加えて月1回の定例会を組織し、案件の検討・共有を図った。③これまで行っていた業務の外部委託、職員室アシスタント連携に加え、業務改善委員会を立ち上げて職務の仕分けに取り組んだ。	B
地域連携	①学校説明会、懇談会、まち懇等の機会に、学校経営方針や目指すべき児童の姿等を説明し、学校への理解を深める。②地域行事に積極的に参加し、保護者や地域の方々と交流を深める。③学校ホームページを活用、発信し、学校の活動を周知できるよう努める。	①コロナ禍において、紙面開催やメール配信での周知など、周知の方法を検討し、可能な範囲で理解を求めた。②交通安全母の会、学校地域コーディネーターなど、各窓口との関係は整えた。③ホームページの学校日記の更新方法を見直し、行事ごとに発信した。	B
児童生徒指導	①「六つ川台小スタンダード」の定着に向けて指導環境を整えるとともに、適時会議をもち、内容の加筆や修正を行う。②児童理解の定例会を設け、児童の状況を共通理解する。③「Y-Pアセスメント」を活用し、多面的な児童理解と具体的な支援・指導を実践する。④不登校児童が学びが継続できるようにする。	①毎月の児童指導委員会において内容を検討し、適宜修正してきた。年度末反省の意見をもとに、教室での確認用として概要版を作成した。②月末に定例会を設定し、情報共有してきた。③「Y-Pアセスメント」を年3回の児童指導委員会において活用し、多面的な児童理解と具体的な支援・指導を実践する。④不登校児童が学びが継続できるようにする。	B
特別支援教育	①手立ての引継ぎや校内研修の実施等、配慮の必要な児童に対しての共通理解を図る。②特別支援教育支援員やボランティアの活用を図り、校内支援体制を整える。③児童や保護者の困り感に寄り添い、特別支援教室における個に応じた指導の充実を図る。	①担当窓口の助言・管理のもと、個別的教育支援計画・個別の指導計画の作成・引き継ぎを行った。②担任からのニーズに沿って支援員やボランティアを配置した。③学習支援・日本語指導・登校支援の場として、児童の困り感に応じて特別支援教室を運営した。	B
多文化共生	①外国の言語や習慣、食べ物等を紹介することで、全校児童の多文化共生の取組を推進する。②外国につながる児童の支援のため、関係機関との連携を図る。③外国につながる児童一人ひとりの状況を的確に見取り、児童本人の日本語力向上支援および保護者支援の充実を図る。	①外国語活動や外国語科において、文化や食生活、言語などを取り上げた。②関係機関と連携をとり、外国につながる児童の状況を把握し、日常指導に役立てた。③講師の協力により、本校において日本語指導を毎週1回実施した。	B
ブロック内 評価後の 気付き	六つ川中学校ブロックでは、「自立のための基礎力」育成にむけた取り組みを長く続けてきた。しかし、この「自立のための基礎力」の内容は、毎年共有して加筆・修正してきたものの、もとはコロナ禍以前、平成の時代に設定されたものである。各小学校が「自立のための基礎力」を視野に入れて学校教育目標や教科等横断的に育成を目指す資質・能力を設定しているが、果たして今の実態に合っているのか、根本的な見直しの必要性を共有した。次年度のMBC準備委員会に引き継いでいく。		
学校関係者 評価	社会の変容に適応するべく、学校に求められる内容や教育活動も変化してきている。また、コロナ禍においてこれまで続けられてきた活動・行事が実施できなくなったり、大幅に縮小されたりする一方で、配慮することは増え、決して生活しやすい環境とは言えない。このような中で、教育活動の見直しを図られ、「何をすべきか」「何を削るべきか」検討されることは当然であるが、かつて行われていたものが次々になくなっていく寂しさは正直感じる。PTAとして、児童に関わる行事だけでなく、組織のあり方も含め、持続可能なかたちを探り協力していきたい。		

重点取組分野	令和 5 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	①単元や一単位時間で育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりをする。②本時のめあて確認と振り返りの時間を大切にし、子どもが主体的に学習を進められるようにする。③重点研究テーマを「自ら学びともに考え 行動する 台小の子の育成」とし、国語科を中心に、自分の思いを豊かに表現できる子を育てる。		
道徳教育	①豊かな心の育成を目指して、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を推進する。②道徳科年間指導計画に沿った全学級の道徳科授業公開を年一回以上実施する。③自分の思いを書いたり話したりする活動の中で、自分自身を見つめたりなりたい自分をイメージしたりすることができるようにする。		
健康教育	①家庭と連携し規則正しい生活を送ろうとする姿勢を培うとともに、食育や歯科保健教育、安全教育を実施する。②「台小体力アッププロジェクト」の運動集会を柱に、児童が運動の楽しさを味わい、外遊びを盛んにしたり、体力の向上に目を向けたりすることができるようにする。		
自分づくり教育 (キャリア教育)	①地域で体験的に学ぶ機会を積極的に設け、他者との関わりの中で自分の思いを表現しながら一人ひとりが自己有用感を高めるようにする。②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、子ども自身の姿容や成長を自己評価できるようにする。		
いじめへの対応	①日常に潜むいじめを積極的に認知し、子どもの心情に寄り添うことを徹底する。②いじめ防止対策委員会を毎月実施し、認知案件の丁寧な経過確認、再発防止に努める。③いじめ防止研修を通し、全職員がいじめに対するアンテナを高くするとともに、年3回の児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制をつくる。		
人材育成・ 組織運営(働き方)	①5年次以下の教諭を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが推進役となって互いに授業公開をし、指導技術の向上を図る。②教務会を定期的に実施し、計画的な学校経営や行事推進に努める。③職務の外部委託や職員室アシスタントとの業務連携など、職務の簡便化・効率化を図り、働き方改革につなげる。		
地域連携	①学校説明会、懇談会、まち懇等の機会に、学校経営方針や目指すべき児童の姿等を説明し、学校への理解を深める。②地域行事に積極的に参加し、保護者や地域の方々と交流を深める。③学校ホームページを活用、発信し、学校の活動を周知できるよう努める。		
児童生徒指導	①「六つ川台小スタンダード」の定着に向けて指導環境を整えるとともに、適時会議をもち、内容の加筆や修正を行う。②児童理解の定例会を設け、児童の状況を共通理解する。③「Y-Pアセスメント」を活用し、多面的な児童理解と具体的な支援・指導を実践する。④不登校児童が学びが継続できるようにする。		
特別支援教育	①手立ての引継ぎや校内研修の実施等、配慮の必要な児童に対しての共通理解を図る。②特別支援教育支援員やボランティアの活用を図り、校内支援体制を整える。③児童や保護者の困り感に寄り添い、特別支援教室における個に応じた指導の充実を図る。		
多文化共生	①外国の言語や習慣、食べ物等を紹介することで、全校児童の多文化共生の取組を推進する。②外国につながる児童の支援のため、関係機関との連携を図る。③外国につながる児童一人ひとりの状況を的確に見取り、児童本人の日本語力向上支援および保護者支援の充実を図る。		
ブロック内 評価後の 気付き			
学校関係者 評価			

重点取組分野	令和 6 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業改善	c1		
道徳教育	c2		
健康教育	c3		
自分づくり教育 (キャリア教育)	c4		
いじめへの対応	c5		
人材育成・ 組織運営(働き方)	c6		
地域連携	c7		
児童生徒指導	c8		
特別支援教育	c9		
多文化共生	c10		
ブロック内 評価後の 気付き			
学校関係者 評価			

中期取組 目標 振り返り	3年続いたコロナ禍のため、まちとともに歩む学校づくり懇話会や学校運営協議会がしばらく紙面開催となっている。発信と受信の相互のやりとりが難しく、関係者評価について課題が残った。制限下において、地域行事が中止または縮小して実施されたため、まちとの交流が難しかった。また、児童の体力低下・運動との関わりでの二極化が一層進んでいることも確かめられたため、実態に沿った地域連携と健康教育の充実にも努めたい。
--------------------	--

中期取組 目標 振り返り	
--------------------	--

中期取組 目標 振り返り	
--------------------	--